

府中町ふるさと歴史散歩

〔第40回〕

大化の改新と律令制と安芸国の成立④

安芸国は今から約1360年前の七世紀中ごろの律令国家の整備とともに成立していた。

国の役所である国府は、一般的にその国の中央部に近い場所でも都に近い地点か、歴史的要衝で、文化・産業の発達してきた土地が選ばれ、碁盤目状の市街地が造られた。そして「所」と呼ばれる部局には、国司の管理の下で文書の作成・受理・保管する公文所、租税をつかさどる税所、国内の田畑に関する帳簿の作成や管理を行う田所、水運の船を手配する船所、地方の産物を買納する税を扱う調所、国庁の守衛を担当する健児所等々、国の統治に必要な色々な部局があった。付属する建物として正倉や国学といった

国府に付属する役人養成の教育機関も設けられ、そこで学ぶ学生や色々な役所に勤務する多数の官人（役人）の居住する市街地もつくられたので、相当広い平野部を必要とした。

府中町では、当然設置されたはずの「所」は一部を除いては確認されていない。榎木川の度重なる洪水などによって消失または埋もれたようである。

文政八年（1825年）に完成した『芸藩通志』に、「安芸国府は今の安芸郡府中村是なり」とあり、同府中村の記事に、「昔、国府を置かれし所、故に此あたりを国府庄とも呼べり」とあり、府中村図には国廳・総社といった国府関連の地名が残っている。また「早馬立」という古代山

陽道の駅家関連の地名も見えている。

中央と地方を結ぶ国家的陸上交通網としての七官道は大化改新以前から整備されつつあったが、駅を設けて早馬を常備し、馬を乗り継いで次の駅まで公文書や役人を敏速に運ぶ、すなわち駅馬の制は大化改新以降からである。『養老令』の厩牧令に「諸道に駅馬を置くこと、大路に廿疋、中路に十疋、小路に五疋」とあって、官道は各駅の置かれた駅馬数の多少によって大・中・小路にランク付けされたが、「大路」は古代日本の表玄関の大宰府（福岡県）と都を結ぶ山陽道のみであったので、いかに山陽道が重要な幹線道路であったかが分かる。そしてこの山陽道こそ都の

朱雀大路から隋唐帝国の王都に繋がっていたのである。

安芸の国府の所在地は、都に近い点と国分寺や国分尼寺があった点、広い土地、さらに県下最大級の前方後円墳である三ツ城古墳があったことからすれば、西条盆地が有力となり、律令盛期の奈良時代には国府は西条盆地にあったものが、その後安芸府中に移転したという説が有力である。

たしかに国府の移転例は出羽国と肥後国にあるが、安芸国の国府の府域の選定に、最初から安芸府中が選ばれずに何故西条が選ばれたのか、そして安芸国の政治的な拠点が途中で何故移転せねばならなかったのか。先学の説明では、海上交通が発展したことから、平安遷都頃に西条盆地から海岸部により近い府中町に移転したというものであり、これは、奈良時代には府中町よりも西条が開けていたという不確か

な論拠に基づいている。

安芸国の国府という一地方の歴史とはいえ、当時のわが国をとりまく東アジアにおける国際情勢を抜きにしては十分な理解は出来ない。

（41回へ続く）

府中町文化財保護審議会会長

横田 禎昭

問い合わせ

教育委員会生涯学習課

☎ 286-3272



平成17年10月に行った「早馬立」と推定される付近（現在の府中町鶴江二丁目・城ヶ丘）での、府中町教委生涯学習課と広島県教委文化課の合同の試掘作業の様子